

『武備志』にみる明代海防の理想像と尖閣諸島の位置づけ

東京大学法学部教授 平野 聡

中国政府は、2012年9月に発表したいわゆる『釣魚島白書』の中で、尖閣諸島の中国における呼び方である釣魚島とその附属島嶼について「歴史・地理・法理において中国の固有の領土であり、中国は争う余地のない主権を擁する」「明朝初期から中国は、東南の沿海において倭寇を防御するために、釣魚島を海防の範囲に組み入れた」と主張しています。具体的には、16世紀半ばに倭寇鎮圧で功績があった官僚・胡宗憲が幕僚の鄭若曾に執筆させた『籌海図編』、1605年出版の『乾坤一統海防全図』、そして1621年に兵法家である茅元儀が著した『武備志』といった兵法書を列挙し、その中に釣魚嶼という名前が現れることを以て「根拠」としています。

しかし前近代においては、今日の尖閣諸島、ここでいう釣魚嶼には、いかなる国も明確な管理を及ぼしておらず、中国の主張には何ら根拠はありません。本論は、中国が示した『武備志』の海防論を、明史の歴史的文脈に沿って読み解くことで、このことを明確にします。

1 釣魚嶼を知るも管理していない明朝

少なくとも、尖閣諸島の位置に島があることについては、古くから今日の東シナ海を取り巻く国々で知られていました。例えば、明代に編纂された航海の指南書『順風相送』においては、羅針盤を操作する目印として釣魚嶼という地名が現れます。また、今の沖縄県を支配していた琉球王朝は、明を中心とした「天下」の秩序の中で臣下の礼をとる朝貢関係にあったことから、明の皇帝が冊封使と呼ばれる使者を首里に派遣し、琉球国王の称号を与えていました。そのときの記録にも釣魚嶼という地名が現れます。

とはいえ当時の明の人々は、今日の尖閣諸島を航海の目印として意識していたのみであり、この島を自らの土地として主体的に管理する発想は存在しませんでした。

そもそも、琉球に渡った冊封使である陳侃が1534年に執筆した記録『使琉球録』では、福建省・福州と那覇の間の航海について、明の側には具体的な経験や記録がなく、琉球人の水先案内人や船乗りによって初めて尖閣周辺を航行したと述べています。それまでは、明が琉球の支配者に国王の称号を与えようと言いつつ、実際には琉球側が称号を受け取るための使者を送っていました。

中国は、浙江省から福建省・広東省に至るまで、東シナ海に面した長大な海岸線を擁し、その沿岸には古くから多くの人々

が住んでいます。そして明代の初頭には「鄭和の大航海」と呼ばれる、アジアから中東にかけての諸外国に朝貢を呼びかける大船団を組みました。明代において、船を建造し外洋に向かう能力がなかったとは言えません。それにもかかわらず、明の権力が目の前の東シナ海を横断して琉球に向かうための知識と経験が欠け、むしろ琉球人に頼るとはどういうことでしょうか。このこと自体が、明という国家と目の前の海域との疎遠な関係を示しているのです。

2 倭寇に苦しむ明と海禁・海防体制の矛盾

そもそも明は、大陸の農業社会に徹底的に根ざし、海域が取り結ぶ外部世界の活力に対して消極的な態度を取る国家でした。

明に先立って中国文明の地を支配していたのは、モンゴル人が建てた元でした。元は、今日のウイグル人や中央アジアの人々にあたる色目人を重用し、銀を用いた活発な経済活動を展開していましたが、豊かな富を生み出す江南地方から大都（今の北京）へと物資を運ぶ大運河の維持管理に悩まされ（途中横切る黄河や淮河の泥が災いしていました）、労役に駆り出され困窮した沿線の人々の反乱の中から起こった「紅巾の乱」で傾いて行きました。元は次第に海上ルートに頼るようになりましたが、運び手の商人集団は 朝廷の足下を見て無理な要求を繰り返す、元の経済は行き詰まりました。ちょうどこの頃、日本では南北朝時代の混乱の中から武装商業集団が数多く現れ、朝鮮半島、そして大陸の沿海部へと勢力を拡大し、略奪を繰り返すようになりました。これを倭寇（前期倭寇）と呼びます。

紅巾の乱の中から成り上がって明を建国した朱元璋＝洪武帝は、「中華」の地が混乱する原因をもたらしたモンゴル人や倭寇、そして銀を用いた活発な経済活動に敵意を抱き、貨幣経済に深く依存せず人々が上下関係を厳しく守ることで調和ある社会を実現しようとする儒学を尊び、内外の秩序を構築しようしました。

この結果、明の人々は里甲制と呼ばれる制度のもとで厳しく管理され、軍人については衛所制のもと、普段は農業をしながら、その収穫で軍事活動を自活させることが求められました。

そして明は対外的にも、自由で活発な貿易は必要ないという態度を取りました。中国の豊かな物産は、明を中心とした「天下」秩序の安定を創るためにのみ使われるべきだとしたのです。そこで明は、外国の支配者が明の皇帝を「天下の主」である

と認め、秩序の維持に協力することを約束した場合に限って、恩恵としての貿易を認めることにしました。外国の支配者が示す忠誠心、皇帝による認証(国王の称号授与)、現物の恩恵がセットになった関係を朝貢関係と呼びます。明はこの原則を徹底的に貫こうとしました。

ここで、北に迫りやったモンゴルと並んで問題になったのが日本との関係です。

朱元璋は、日本が倭寇対策に積極的に取り組むことを期待して使者を日本に送り、朝貢を促そうとしました。しかし日本側は、その態度が無礼であると反発するなど紆余曲折があり、朝貢関係が成立したのは足利義満の時代でした。しかしその後、室町幕府の低迷の中で日本との関係も途切れがちになり、さらに応仁の乱ののち大内氏と細川氏が朝貢の利益を争う中、浙江省・寧波で1523年に暴力沙汰が起こると(寧波の乱)、明は日本との関係そのものに嫌気を感じ、逆に日本の朝貢を拒むようになりました。

しかしながら日本、とりわけ西国の大名や商業集団にとって、明との貿易は魅力的であったことに変わりはありません。しかも16世紀半ばに日本銀が豊富に産出されるようになると、この富とともに明との密貿易が深まりました。

そこに合流したのが浙江や福建の沿海民です。彼らはもともと大陸での農業よりも海域での商業活動の才覚を持った人々でしたが、朱元璋の厳格な朝貢関係志向、そして倭寇対策もあって民間貿易を一切認めない海禁政策のもと、そもそも海に出ること自体を禁じられ、生活の糧を大きく奪われていました。里甲制のもと陸で農業や労役をするよう強いられても、重い負担に耐えかねて多くの農民が逃げ出し流民・遊民になることが当たり前であった中、彼らも密かに海へ出て漁撈、そして密貿易に従事し、さらには略奪集団に身を投じて生きるより他はなかったのです。

これに対して、取り締まりに当たるべき明軍の衛所制も、年々瓦解の一途をたどっていました。各地の衛所、そして水寨(軍港)に配置された兵士は職業軍人ではなく、軍戸という身分で農耕しながら、その収益で軍務に就いていました。しかし中央から派遣された将官は彼ら軍戸を搾取し、逃亡者が相次ぎました。この結果、軍の陣容が縮小の一途をたどり、密貿易集団や略奪集団との衝突を避け見逃すようになったほか、沖合の島々に設けた要塞を放棄して大陸の沿岸へと退却し、しかも放棄した要塞が略奪集団に乗っ取られるなど、日常的な海防体制そのものが揺らいでいたのです。

その証拠に、中国政府が「釣魚嶼も含めた海防範囲」の「証拠」として示している『武備志』巻二百十の「福建沿海山沙図」や、巻二百十一の「浙江沿海山沙図」を見てみると、例えば福建省・福州にほど近い平潭島(海壇山)や、浙江省・温州にほど近い玉環島(玉環山)など、本来であれば多くの人の居住に十分な面積を持つ島々の多くに、軍事拠点が全くないことが分かります(なお、図において多くの島々は「山」と表現されて

います)。要するに、明は大陸沿岸のすぐ目の前に浮かぶ主要な島々すら実効支配を失っており、これらは明の支配を逃れて勝手な密貿易・略奪・漁業などで生きる人々が入り乱れる、混沌を極めた空間となっていたのです。

彼らの一部は、季節風に乗って五島列島周辺から、あるいは朝鮮半島・黄海を回り込んでやって来た日本人と結びつき、大胆な略奪や密貿易をほしきままにしました。これが16世紀の後期倭寇の姿です。そして、民間貿易を厳しく禁じているにもかかわらず、膨大な日本銀が明に流入して、明の経済が大いに盛り上がるという、奇妙ながらも疑いなく重要な明史の一側面が現れました。その最も代表的な人物である王直は、日本の博多商人と深く結びついて巨万の富を上げ、彼が拠点とした浙江省の双嶼は、全く明の官憲が及ばない事実上の自由港として、日本人やポルトガル人も来航し繁華を極めました。

ところが、1547年(嘉靖二十六年)に浙江巡撫に着任した朱纨(しゅがん)という人物は、このような海域の無秩序を見かねて双嶼を総攻撃し、一旦総崩れになった倭寇は各地を激しく略奪したほか、密貿易商人はますます王直を中心にまとまり、今度は舟山諸島の烈港に拠点を築いて抵抗を続けました。

そこで1553年(嘉靖三十二年)、胡宗憲・戚繼光といった將軍に率いられた明軍が烈港を総攻撃し、逃れた倭寇が狼藉を極めました。この一連の展開を「嘉靖大倭寇」と呼びます。

しかし最終的に、胡宗憲が王直を懐柔し(取り込み)、さらには北京の方針で王直が処刑されたこともあり、後期倭寇は求心力を失って鎮静化したほか、1567年(隆慶元年)に明は長年来の海禁を解除し、日本を除く外国の民間商船の入港を認めるようになりました。すると沿海部の人々は、もはや密貿易などの混沌とした秩序に身を投じる必要はなくなり、平穏な秩序がようやく実現しました。

とはいえ、南洋諸国との民間貿易で売買された明の産品が、さらに日本に転売されることは防ぎようがありません。そこで琉球を媒介として、あるいはベトナムのホイアンやタイのアユタヤなどの日本人町が発達し、間接的な日明貿易が続きました。

したがって明としては、いつ再び日本人の強い影響が及ぶのか、警戒を怠るわけには行きません。また「嘉靖大倭寇」は、胡宗憲や戚繼光といった武将の活躍をはじめ、明軍の総力を上げることで、辛うじて鎮静化することに成功しましたが、根本の問題として、勝手に海に出た人々が倭寇と結託して密貿易や略奪を働くことを許した日常的な海防体制の緩み・崩壊がある以上、それを如何に再建するのかという課題は引き続くことになります。

3 『武備志』の主張とは何か

『武備志』は、このような背景のもと、明末の1621年(天啓元年)に、若き兵法家・茅元儀によって著されました。

結論からいえば本書の海防論にあたる「巻二百九・海防」

は、過去の兵法書を比較検討しながら、明の海防体制が抱えてきた問題点と、著者自身の見聞を重ね合わせて、大略以下のように説くものです。

- *倭寇は五島列島や朝鮮半島・黄海から、季節風に乗って襲来する。
- *したがって、倭寇が最初に到来する海防の最重要地点にあたるのは、杭州湾の沖にあたる舟山群島、とりわけその最も東にあたる陳銭諸島（今日の嵎山島）である。
- *陳銭諸島は華と夷、中華の文明と夷狄の混沌を分ける境界である。
- *倭寇は陳銭諸島から、風向きにより三方向に分かれ、蘇州方面・杭州方面・浙江南部から福建省にかけての海岸線を襲い、各地の島々に巢食う。
- *明の防衛線は大陸の湾口や舟山諸島の一部の島々・湾口に後退し、倭寇撃退後も大陸から目の前に浮かぶ島々や沿岸の海域に対して、十分な管轄権・制海権を回復していない。
- *明は一刻も早く水軍を再建し、大陸の沿岸にある水寨（軍港）・衛所（駐屯地）や各省の将軍・士官は、自らの所轄地域だけでなく隣接する地域・省との連携体制を構築し、切れ目のない堅固な倭寇警戒体制を構築すべきである。
- *とりわけ、山に守られた湾口・良港を確保できれば、台風被害を避けながら少しずつ防衛体制を再建できる。倭寇をなるべく大陸側に追い込み、島々に蔓延させるのを避け、かつ大陸に上陸させず、沿岸で殲滅すべきである。

したがって本書の海防論は、舟山群島から南の大陸沿岸を舞台・対象として論じているものです。この中で、大陸から遠く離れた今日の尖閣諸島や台湾は、「釣魚山」「鶏籠山」の名で、付録の地図「巻二百十福建沿海山沙図」の二十一頁表に現れますが、これらはあくまで、はるか沖合の航海中に見える島として知られている存在、あるいは支配することは全く考え及ば



参考図：武備志・沿海山沙図を踏まえた中国東南沿海部地図（白地図バージョン）

ない伝聞の世界として、地図の片隅に表記されているに過ぎません。

そこで以下具体的に、『武備志』の中でも明の海防体制の実現と理想を語った「巻二百九・海防」の内容を読み解いて行きます。

最初に、「巻二百十・福建沿海山沙図」「巻二百十一・浙江沿海山沙図」に現れる主な島々や防衛拠点を落とし込んだ白地図をご覧ください。尖閣諸島（釣魚山）や台湾（鶏籠山）・澎湖を除いたあらゆる地名が大陸沿岸・沿海に集中しているさまを見るだけでも、『武備志』海防論の関心は大陸の目の前の海にあることが明らかですが、以下『武備志』の様々な説明に沿って、文意に則った図を付して読み解いてゆきます。

4 舟山群島を確保せよ

まず著者は、中華の地がこれほど海防問題に悩まされるようになったのは明代になってからであり、しかも時代が下るにつれて海防体制が墮落したという認識のもと、倭寇をめぐるこれまでの経緯を振り返ります。

●一頁裏

日本は宋王朝以前、歴代王朝に挑むようなことはなかった。しかし元代の初め、(1281年の元寇・弘安の役で)范文虎の軍を破って以来、次第に狡猾な態度を見せるようになった。

明の太祖洪武帝と太宗成祖永楽帝は、その威徳によって彼らを懐柔し従わせることが出来たものの、しばしば(日本は)害毒をほしいままにしてきた。故に、沿海部は戦々恐々とするようになった。

(中略)

嘉靖年間(1522-1566年)には、海防が失敗に陥り、天下の富が倭寇に激しく荒らされ、王朝体制は全く対応できなかった。虎のように勇敢な臣下を糾合するのでなければ、手をこまねいているうちに悉く沿海の土地と富を捨て去ることになってしまい、中原(中華文明が生まれた黄河の中流)、そして明の隅々にまで勢力を広げてしまう。これでは永きにわたる安寧など得られようもない。

そこで、倭寇に対する防衛の要は、海において拒むということに他ならない。初めに、諸家の議論を検討し、胡宗憲(嘉靖の倭寇対策で功績を挙げても、逆に倭寇との結託を疑われて逮捕・自殺した名将)・鄭若曾(胡宗憲の幕僚で、籌海図編の著者)の議論・著作を参考に、海防地図を総合的に描くこととする。それにより、防衛の拠点を様々に検討し、兵力を充実させる必要性を永きにわたって示すこととする。

以上の認識を踏まえて、著者は「海洋を御するの論・二」と題する文章の中で、海防体制再構築の最大の要として、倭寇がまず渡来する舟山群島、とりわけ陳銭諸島の重要性和、台風を避けて船団を分けるための防衛拠点としての、山を背負った湾口を確保する重要性を指摘します。

●三頁裏～四頁表【図1】

明の初め、沿海部の海衛(衛所)は大小様々な兵船を百余隻建造し、海域で官軍を指揮統率し、交替で哨戒活動を行っていた。海域の門戸にあたる島々は至るところに烽火を備えた監視所があり、停泊することも出来た。

その後、海上警備に関する指揮命令は緩み、軍船の主要な停泊地は杭州湾南側の定海(寧波市)、杭州湾北西の乍浦(嘉興市)、蘇州近辺の呉淞(上海市)、劉家河(江蘇省太倉市)となった。

とはいえ、そもそも乍浦の地は遠浅で、風を避けるための山を背負った地形はない。

(中略)

最近の情報では、台風の直撃を受けて壊滅的な被害を受けたという。従って、海中(杭州湾の入口)に浮かぶ洋山殿の前に集結して停泊する方が良く、むしろ最初からこちらを停泊地として選ぶべきである。また(長江河口部の)呉淞及び劉家河は海に出るには時間がかかり、海防の拠点に向いた場所というわけではない。

そこで筆者はこう考える。乍浦の船団を分割して、洋山が蘇州・松江の船を守り、馬蹟が定海(寧波)の船を守ることで、主要な海上交通路を守ることが出来る。そして(洋山・馬蹟・定海)三山が連携して哨戒するならば、倭寇の来襲を防ぐことが出来る。

さらに、その外側の陳銭諸島は、とりわけ賊にとっての要衝となっており、(南直隸・浙江・福建に倭寇が向かう)三つのルート of 要となっている。

こうして著者・茅元儀は、陳銭という場所をこの論考の一つの焦点として明確にします。

そして、16世紀半ばの倭寇対策で功労を挙げた俞大猷(1503-1579年、福建泉州人。『剣経』著者)も、陳銭を最適な駐屯・停泊地とすべきとしたことに触れています。その上で著者は、浙江省と南直隸(今日の江蘇省蘇州周辺)が連携して、倭寇侵入ルートを押さえ込むべきことを主張します。



図1: 乍浦の船団を洋山・馬蹟に分けトライアングル化



図2: 陳銭をめぐる相互支援

●四頁裏～五頁表【図2】

(南)直隸と浙江は名称も土地も異なるが、(倭寇防衛では)実に一家のようなものである。もし(陳銭防衛の指揮)官を設けて総理しなければ、賊はここで(中国の)門戸に入り、各方面へと分かれて行く。賊がひとたび内地に入れば、気まぐれに南北へと駆け巡り、入り乱れて掠奪をするようになるだろう。故に必ず陳銭を守り、馬蹟などの三つの拠点を分担して防衛すべきである。このようにすれば賊は逃れようがなく、挟み撃ちにできる。総兵官・正副二員がそれぞれ金山(上海市)・臨山(浙江省慈溪市)に駐在し、陳銭防衛のために春秋交替で管轄すべきである。そして部下の将は馬蹟などの三大拠点到り、その地の利を信じるならば、防衛は容易であり、余計な労力を費やす必要もない。

もっとも、陳銭諸島やその周辺の海域には、明の支配からこぼれ落ちて勝手に海に出た貧民・遊民が多数存在し、彼らが倭寇と結託してきたという歴史や、泥の堆積による浅瀬の存在といった様々な問題があります。そこで著者は、『籌海図編』を著した鄭若曾が、自ら海域を視察して見聞したことを判断基準として考えた対策を紹介しつつ、改めて舟山群島周辺での哨戒体制を日常的に構築し、最終的には上陸前に倭寇を打ち取る必要性を説きます。

●五頁表～六頁表

従来、(大陸側の)定海・奉化・象山一帯では、貧民が海に頼って生きており、小舟に乗って海域を往来してきた。その結果、陳銭の下八山(陳銭諸島)に至って貝や海藻を採取する者は万単位で存在した。そこに毎年倭寇の船が押し寄せ、五島列島から出航して東北の風に乗ると、五、六日の航海で陳銭の下八に到達できる。そこで倭寇は船団を分けて、福建・浙

江・南直隸を犯す。そこでまず倭寇の被害に遭うのは南直隸であり、殺される者や、捕虜となって先導役をさせられる者が相次いだ。

この結果、(海上の)島々は遥か遠く、管理も手薄になり、居民が防衛することもなく、賊がさらに深く入るのを許してしまった。

(中略)

(陳銭の海域は)内地から非常に遠く離れており、声援が及ばず、補給するにも不便で、風と潮の流れには順逆があって複雑で、錨を下ろして停泊するのに向くのか否かという問題、鯨などの生物の襲撃、座礁の危険、潜伏して攻撃することの難しさもあり、将官の命はゴロゴロと転がる卵のように危うい。そこで誰も

が、ここでの海防の難しさに当惑してしまった。

とはいえ、もし実際に海洋を防御する体制を確立するならば、倭寇の到来も確実に探知することができ、備えも極めて容易になる。

乙卯年(1555年の王直が主導する倭寇大攻勢)以前には、倭寇が上陸しても誰もそれが倭寇だと気にしていないという状況があった。しかしそもそも、将官が警戒活動や実戦を恐れて何もしないのは、咽んで食べたものを無駄にするようなもので、あってはならないことだ。

そこで愚見の如く、まずは遠洋にて賊を哨戒し、彼らを決して海域にはびこらせてはならず、近海にて賊を撃ち、決して上陸させないようにすべきだ。

以上のように、明代海防の第一の要は舟山群島、とりわけ最東端の陳銭であることが明らかになりました。そこで著者は「洋山記」と題する文章で、舟山群島の中でも軍船の停泊に適した洋山島(今日では大型コンテナ船用の洋山深水港が立地)の地理に触れつつ、華と夷、中国と野蛮な外国の人々が入り乱れる、境界としての舟山群島の重要性を引き続き力説します。

●六頁表～七頁表

鄭若曾は次のようにいう。

洋山は蘇州・松江方面から倭寇を押さえ込むに当たっての、海上ルートの最後の守りだという。かつて聞くとくでは、この島は泥海が遠浅に広がり、船の停泊は出来ないものの、娘娘廟の南側だけは泥が少なく、多少は停泊できるとのことであった。

しかし、今では全くそうではないことが分かっている(停泊に便利な地形である)。

そもそも、海の船は必ず山巔(山や斜面を背負った湾口)を

得て停泊すべきであり、山嶽のない島では台風を回避できない。どうして停泊地を選ぶことが出来ようか。

洋山(中略)には十八の山嶽があり、あたかも大きな湖のようところに数百隻を停泊させることが出来る。湖状の一帯の北には娘娘廟がある。ここで得られる水は海水で、飲用には向かない。しかし山中には泉があり、淡水ゆえ汲むことができる。そこで倭寇の船と我々の兵船は必ず寄港して汲んでいる。娘娘廟の東には、(かつて) 巡検司が駐屯していた山嶽の跡地がある。(中略)

そこで(鄭若曾は) 機会を見て、浙江と南直隸の哨戒船はここで待ち合わせ、互いに明の軍船であることを証明し合う牌符を交わし合い、信頼関係を確認すべきであると建議した。

(著者・茅元儀のみるところ、鄭若蘇の考えは) 深い見識があると言える。何故か？

洋山はさらに南に向かうと定海、北に向かうと呉淞に到達し、どちらも僅かな航海である。だからこそますます、浙江と南直隸が交わる位置にある最適な土地なのである。

その上で著者・茅元儀も、自ら舟山群島を視察して回った認識を以下のように紹介し、「まさに天の心がここに拠点を設けてくれたものだ」「華と夷を、舟山諸島の諸々の島々で分けてい

る有り様は、まさに浙江防衛の盾だ」とした上で、改めて「中国の海と山が尽きる」陳銭諸島の重要性に触れます。

●七頁表～七頁裏【図3】

定海の先に広がる外海には、一つの島があるだけではない。舟山はその魁・代表格である。舟山の東北には、水上の門戸にあたる長塗・代山(岱山)・衢山(大衢山)といった島々がある。(中略)

陳銭は中国の海と山が尽きるところである。倭寇の船団は夜が明けると襲撃してくる。万里の風と波は茫漠として際限がない中、(倭寇は) 陳銭を望み見れば、「中国は間もなくだ」と喜ぶ。

陳銭には停泊可能な島があり、ここから南北に航海の向きを変える。もし(倭寇が) 馬蹟・大衢を経て、さらに舟山を過ぎてしまえば、両浙は被害を受けてしまう。(倭寇が) 大衢・舟山を経由せず、洋山の西に行き、さらに北へと向かえば、(中略) 蘇州・松江・長江北岸は完全に行き着くところまで蹂躪されてしまう。

以上で舟山群島、とりわけ陳銭諸島の重要性をめぐる議論は終わりです。



図3：華夷の分かれ目としての舟山・陳銭と、倭寇の侵入ルート

5 大陸の沿岸を連携で固めよ

続いて著者・茅元儀は、尖閣諸島をめぐる当時の認識に最も関連する沿海警備論である「海岸を固めるの論」と題する文章へと続けます。この中で著者は、唐順之(1507-1560年、『武編』を著した兵法家。鴛鴦陣という戦術を発明し、倭寇鎮圧に功績のあった戚継光や俞大猷に影響を与えた)の議論を紹介しつつ、倭寇が舟山群島の海域を突破して大陸の海岸に迫った場合にも、管轄を超えた連携による防御を徹底させることにより、倭寇が浙江各地を縦横無尽に荒らし回る事態を回避できることを読者に意識させます。

●七頁裏～八頁裏【図4】

賊を海域で防御できなければ、海岸の守りを緊要の第二の防衛策とすべきである。

新たに到達した賊が飢え疲れれば、南へと向かって巢穴を求めるため、彼らを迎え撃つことは容易である。

もし彼らを内地(大陸側)に入れてしまい、正面から彼らを殲滅するというのでは、我々の側の損害も多い。

従来の沿海の防御は、城を構えて遠巻きに様子を眺めるばかりで、幸にして賊が何もせず通過するのであれば、それで免罪してしまい、(その後で引き起こされる)内地の荒廃を全く顧みない態度であった。また内地の防御も、幸にして賊が到達しないのであれば、沿海を応援することには積極的ではなかった。

今は全くそうではない。沿海の防衛拠点を担当して定める

ことにより、内地を保護すべきである。(中略)

賊が入って来る場所に並んで対峙し、沿海の文武の将兵官吏がよく連携して徹底抗戦するならば、賊の先鋒を抑え込み、賊の下船を阻むことができる。そうすれば賊が上陸して内地に深く入ることも出来ない。首級を挙げることはできないとしても、それは奇功と言えるだろう。倭寇を平らげる方法はこのようなものである。人々は、謹んで海岸を守るべきことを知ることになるだろう。したがって、幸にして賊が何もせずに通り返って行くのを見逃すことは決してせず、門戸の防衛を自らの問題と捉えて内地を安んじるという方針を取るべきである。

以上に見たように、舟山群島における相互連携、突破された場合には大陸側の沿岸における徹底抗戦という戦略が明らかになりました。すると次に、大陸沿岸の長大なりアス式海岸をどのように防衛するのかということが問題になります。先述の通り、明は大陸から見て目の前に浮かぶ島ですら実効支配を失い、水寨(軍港)や衛所・烽火台などはほとんど大陸側に退却していますし、明が退却した後の島々は、沿海民と外国人が省の違いを越えて入り乱れた混沌とした空間になっています。そこで、引き続き「会哨を勤めるの論」では、大陸側に残された陣容を再建して、省を跨いだ広域連携による哨戒活動を強めるという戦略が示されます。とりわけ、賊を発見した場合には東から南西方向へ、すなわち大陸側へ押し込むように追いやるという記述が目立ちます。ここでも決戦の舞台は大陸の沿海であると意識されています。



図4: 浙江を荒らす倭寇への対応

●八頁裏～九頁裏【図5】

胡宗憲曰く、広東・福建・浙江の三省は大海が連なっており、地域を区切って防衛するにも限界がある。もし境界を定めてそれぞれを守るということであれば、孤立した要塞が敵の襲

撃を受けることになり、非常に脆弱で危うい。

したがって、賊と戦い捕らえる戦略は、異なる拠点どうしが相互に頼み合うというものでなければならない。かねてからの野蛮人（日本人に限らずポルトガルなど南蛮も含む）の犯罪を

考えるにつけ、その多くは広東・福建・浙江の三省の人が関わっており、通過後は夥しい略奪となってしまう。南の風が満ちる頃になれば、夷狄の船を導いて広東から北上し、漳州・泉州に到達し、興化（莆田）や福州周辺に蔓延してしまう。北の風が満ちる頃になれば、夷狄の船を導いて浙江から南下し、福州・寧徳に達し、興化・泉州周辺に蔓延してしまう。そして四方八方の無頼が彼らを受け入れて、水先案内を買って出ることになる。もし兵を調達して彼らを一網打尽にしようとするならば、東から南西方向に（大陸の湾口へ向かって）攻めることになる。もし夷が北に逃れれば外境（明の勢力圏外の島々）に隠れてしまい、追い詰めることは出来なくなる。

（中略）

また、ある場所の禁令の厳しさを見るや、他の省に紛れ込むという手合いの姦民がいる。福建にいる者の中には、広東で船を建造したのち浙江に貸し出し、郎党を挙げて野蛮人の中に入って行くものもある。これらは三省で広く見られる弊害である。

（中略）



図5: 福建沿岸を襲う倭寇

本サイトに掲載する資料等は、政府の委託事業の下で有識者の助言を得て、調査・収集及び作成したものであり、本サイトの内容は政府の見解を表すものではありません。

【図6】

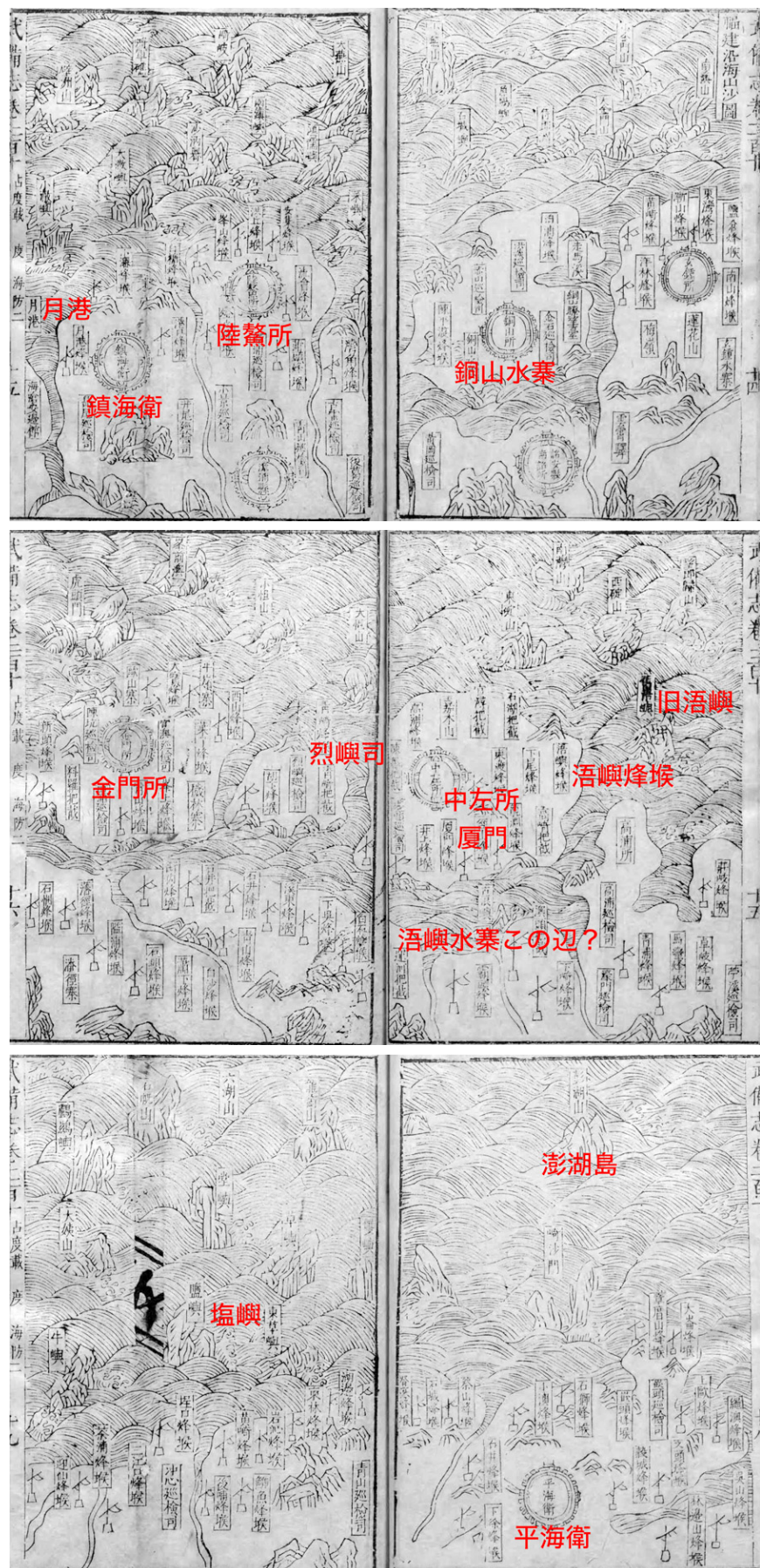
各官は厳しい態度をとり、境界において合同で警戒体制に当たらなければならない。福建にいる者は(中略)広東側の兵と連携すべきである。上は松門の千戸所まで哨戒して浙江側の兵と連携すべきである。浙江にいる者は、(福建の)流江の河

口付近に至り、烽火門の兵と連携すべきである。広東にいる者は(中略。福建南端の)銅山の兵と連携すべきである。倭寇の襲来があれば、互いに声援を送り共同作戦を立てて捕らえるべきである。そうすれば賊の勢いは必ず孤立して進退に窮し、海の憂いは消えて安寧が実現しよう。

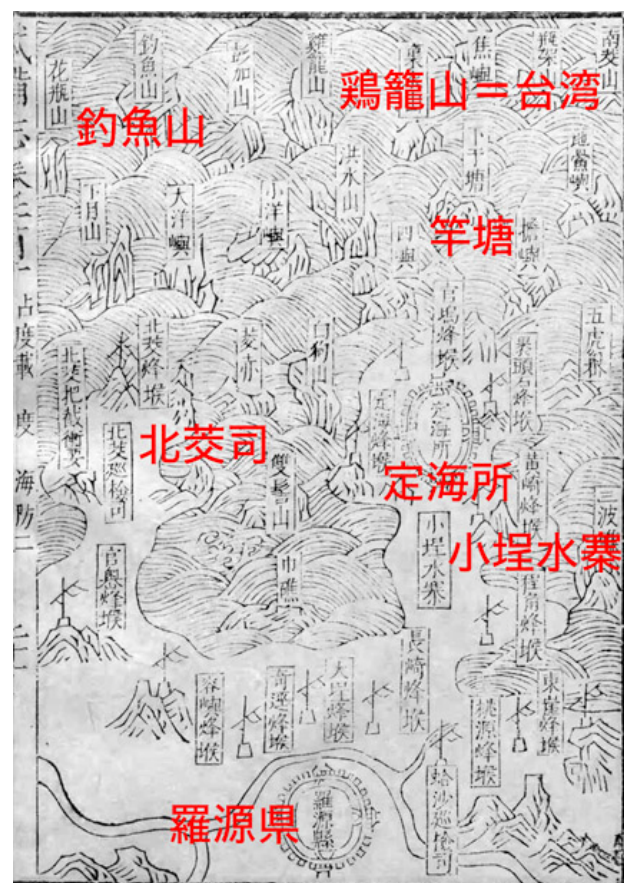
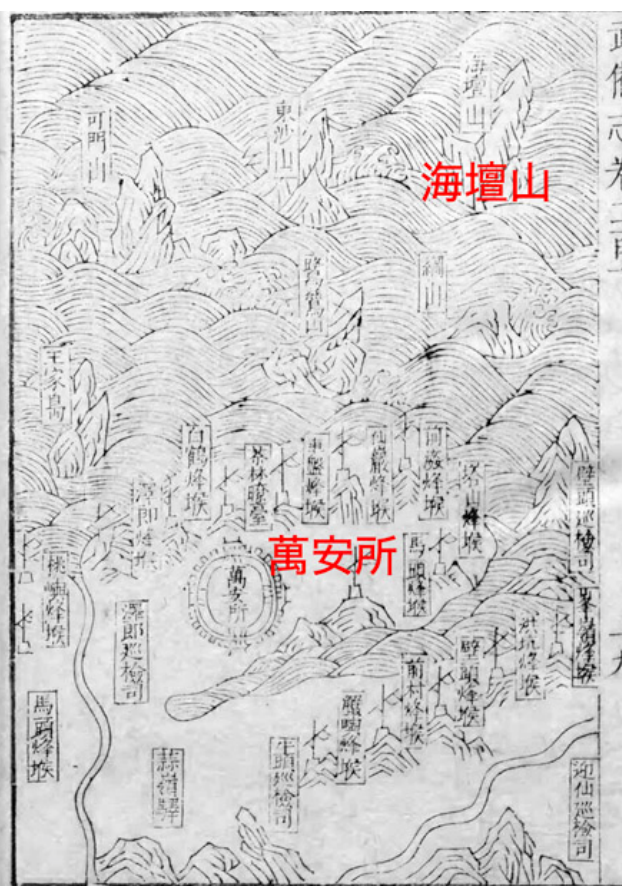


図6:各省の切れ目ない連携

そのうえで、著者・茅元儀は、福建における沿海海防体制の要として、五つの水寨(軍港)を紹介します。この中で挙げられている地名と巻二百十一の「福建沿海山沙図」、そして現在の地図を比較対象すれば、海防の具体的対象は大陸の沿岸から見てすぐ目の前のベルト上の海であることが一目瞭然です。福州の近辺にある平潭島ですら拠点を置いていない以上、福州の北東にある羅源湾の遙か彼方に浮かぶことが示されている尖閣諸島・台湾・澎湖島を防衛する発想は片鱗も見られません。



参考：福建沿海山沙図『武備志』(巻二百十一)



参考：福建沿海山沙図『武備志』（卷二百十一）

●九頁裏～十頁裏【図7】

烽火門水寨は福寧州内に設置し、官井・沙埕・羅浮を南北中の三大哨所とする。(中略)

小埕水寨は福州府連江県に設け、閩安、鎮北、北茭、焦山な

ど七巡検司を所轄する。(中略)

南日水寨は興化府莆田県に設け、沖心、莆禧、崇武などの衛所を所轄する。(中略)

浯嶼水寨は泉州府同安県に設け、上（北）は圍頭から南日まで至る。下（南）は井尾から銅山に至る。

銅山水寨は漳州府漳浦県に設ける。北は白金山で浯嶼の管轄範囲に接する。南は梅嶺で広東に達する。

南から北に向かって哨戒活動をすれば、銅山は浯嶼と連携し、浯嶼は南日と連携し、小埕は烽火と連携するといったかたちで、備えは万全となる。

北から南に向かって哨戒活動をすれば、烽火は小埕と連携し、小埕は南日と連携し、南日は浯嶼と連携し、浯嶼は銅山と連携するといったかたちで、備えは万全となる。哨戒ルート of 連絡の勢いは、常にそこに山があるかの如く磐石で、その陣容は美しい魚のようである。防御の方法はこれを超えるものはない。

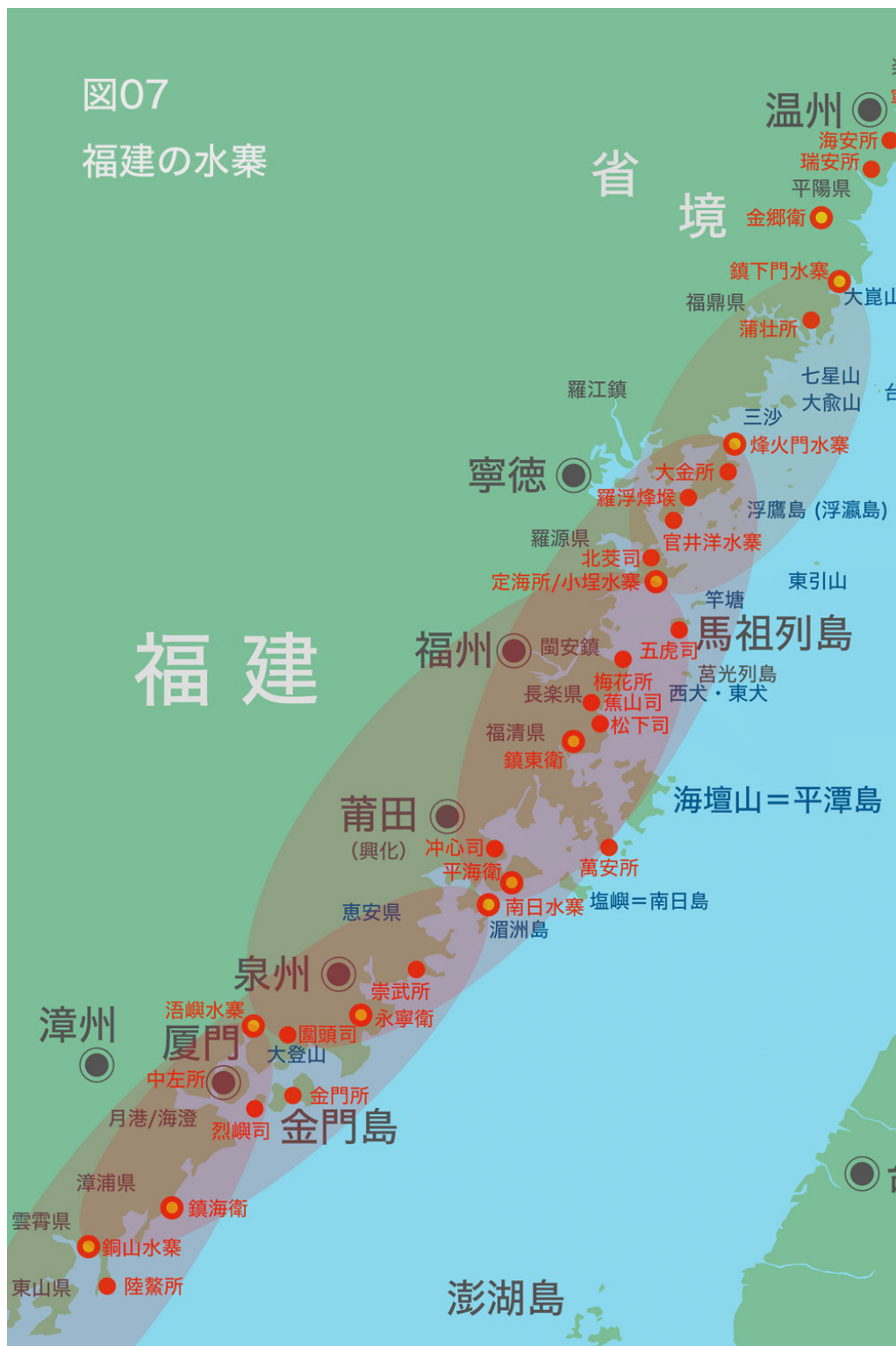


図7：福建各水寨の担当水域

6 浙江の海を段構えで防御し、倭寇の動きに柔軟に対応せよ

いっぽう、風に乗り渡来する倭寇に対して常に必ず最前線となる浙江については、舟山群島を中心とした様々な島々を「界の上段・中段・下段」というゾーンに分け、哨戒ネットワークを展開することが説かれています。

●十頁裏～十一頁裏【図8】

浙江を総じてみると、沿海の諸山・島々には三つの境界線がある。(中略)。

冊子・金塘・大樹・蘭秀・隻嶼・隻塘・六横・韭山・塘頭などの山は、上段の界である。

灘山・許山・羊山(洋山)・馬蹟・両頭・洞魚山・三姑・霍山・徐公・黄澤・大小衢・大仏頭等の山は、中段の界である。

花脳・求芝・絡華・東庫・陳銭・壁下などの山は、下段の界である。ここは、倭寇が必ず經由するルートである。

海防は船舶の用意を最も急務とする。

(中略)

春汛(桃の花が咲く頃)に合わせて戦船は海に出る。最初の哨戒活動は三月に二回、四月には三回行い、五月の小陽の汛

にあたっても慎重に哨戒を進める。

毎年六七八月は風が激しく、船は出航すべきではない。十一月と正月も航海には一般的ではない。

三月から五月にかけては東北の風が多く、倭寇の航海は非常に容易になる。十月の小陽汛の頃にも渡来する可能性がある。海寇は海島に停泊し、隙を見て大陸に渡ってくる者もある。それゆえに、春秋の二汛には、予防的な警戒体制を厳しく取るべきである。

(中略)

そして著者は、「界の下段・中段・上段」の順に、倭寇の侵入に対して兵力を出動させることを説きます。この部分においても、陳銭が中国と夷狄を分ける最前線であるという大前提は変わりません。また、濃霧や風波の中で弱気になる将官や兵士を鼓舞するため、倭寇を発見後に駆逐した場合よりも着実に撃破した場合の賞与を引き上げれば良いと提案します。

●十二頁表～十二頁裏【図9】

賊が中界(明が管轄する海域)に突入すると、沈家門・馬墓の兵船は北に出動し、浙西から来た兵船とともに作戦行動をとる。



図8: 浙江近海の「上段・中段・下段」



図9: 浙江における防衛体制の責任分担

南に出動すると普陀・青龍・洋葦山を過ぎて、温州・台州の兵船とともに作戦行動をとる。こうすれば上段の界に賊がぶつかるようなものである。

(中略)

ゆえに、今日では作戦上、内より外に向かう三つの防衛の要がある。

陳銭において(直隸側と)哨戒の管轄を分け、馬蹟・羊山(洋山?)・普陀に至る線を第一の要とする。

沈家門・馬墓から出陣する水軍を、第二の要とする。

総兵督が兵船を発するのを第三の要とする。

このようにすれば、備えること密の至りである。

問題は、海上の霧が朦朧として距離を判別し難く、風波が突如荒くなることで安危を測り難いということである。加えて、潮の流れに順逆があるため、哨戒の連絡に困難があることである。そこで、邪な将官がこのような困難にかこつけて、まともに任務に当たらないという可能性が高い。どのようにすればこのような現象を打破できるか。

海上にて師を用いるようになって以来、賊を迎撃したものはごく一二の例しかない。

一方、賊を追い去らせた者は、その理由を書き連ねて正当化する場合が多い。

そこで、賊を迎え撃った場合の賞与を、賊を追い去らせた場合の賞よりも優遇すべきである。また、賊に対する処罰も、これまでの賊よりも厳しくすべきである。

季節風が強まる季節には、副総兵は警報の有無にかかわらず親しく海洋に出て、(各地の水軍を司どる)把総を厳しく監督し、真剣に取り組んで(皇帝の)命に応えるならば、自ずと海寇を抑えることは可能であり、辺鄙な場所も平穏になる。

こうして浙江・福建の沿岸・近海における海防を論じる『武備志』の記述も佳境に入ってきました。著者は改めて、皇帝が立てた制度の趣旨を汲み取った南直隸・浙江・福建の相互連携について念を押します。そして、座礁の可能性がある杭州湾東側・舟山諸島北側の海域では、倭寇の船は風に乗って一定の方向に動くことから、最前線で常に哨戒し海域を熟知した明の側が適切に対応して、自由に逃げ惑いいうわけではない倭寇を着実に討ち取るべきだとします。

●十三頁表～十三頁裏【図10】

福建・浙江は海洋に直面し(中略)利害・安危は「輔車相依る」ようなもの(=密接な相互依存関係)である。ゆえに皇帝は浙江巡撫に命じて浙江・南直隸・福建を総合的に監督させ、哨戒を分担する各官には互いに応援をするようにさせている。勝手に自らと他者の持ち場を分けて、相手方に関与せず、自らの範囲だけにとどまることは許されず、責任は互いに連なりあうようになっている。これは廟謨(皇帝のはかりごと)が善であることの現れであり、それが機能するからこそ海防は固くなるのである。

愚考するに、海中の山沙の状況は、南は舟山島に起こり、北は崇明島に至る。それは或いは途切れ、或いは続くかのようで



図10: 舟山周辺の倭寇侵入ルート

ある。暗い沙が連なり隠れているため、座礁する可能性は高い。したがって、賊の舟の中でも大型の部類については、やたらと向きを変えて航行することは不可能である。

(倭寇が)東北の風に乗って来るのであれば、必ず下八・陳銭・馬蹟などの島々から入って浙江を犯し、やがて蘇州・松江にぶつかる。

真東からの風に乗ってくるのであれば、必ず茶山(陳銭の北西にある馬鞍列島)から西に向かって淮揚州(揚州近辺)を犯し、やがて常州・鎮江にぶつかる。

(倭寇が)まさに北風に乗ってくるのであれば、必ず琉球方面から福建を犯し、温州・台州にもぶつかる。三方面の長距離にわたる動きを一ヶ所から見渡すのは困難である。

●十三頁裏～十四頁表

【図11】

したがって総兵官は、各地の把総を指揮監督して、千百戸等の船をしっかりと把握し、海上の往来を連携して哨戒しなければならない。

浙江方面について、南方向では沈家門の兵船が福建の烽火門に至り、ここで小埕から(北に)来た兵船と会同すべきである。北方向では馬墓の兵船が哨戒して蘇州洋の洋山に至り、竹箔沙から(南に)来た兵船と会同すべきである。

蘇州・松江方面について、南方向では竹箔沙の兵船が哨戒して洋山に至り、浙江の馬墓の兵船と会同すべきである。(中略)

こうして、諸々の防衛拠点が哨戒で連携し合うさまは、まさに長蛇のようなものである。群のように並

び齊えれば、あたかも丘や鼎のようである。南北から夾み撃ちにすれば、決して(倭寇を)容れることはなくなる。単にいつとき倭寇の船を駆逐するのみならず、殆ど永遠無窮に倭寇の患いを取り去り、安定を実現できる。



図11：兵船の連携体制の理想像

7 結論・尖閣諸島は無関係

以上が『武備志』のうち、中国が「明の釣魚嶼に対する海防管轄」の「根拠」と位置付ける部分の全貌です。これまで本論で示してきた全ての解説図を最後に重ね合わせてみますと、確かに海防の理想像が長蛇のように、細長い丘のように示されていることが分かります。【図12】

しかしその細長い連携の帯の中に、「知っている」だけに過ぎず大陸からも遠く離れた釣魚嶼という島、すなわち尖閣諸島が組み込まれていることを示す記述は何一つありません。「明が釣魚嶼を海防範囲に加えていた」とする『釣魚島白書』なる文

書は、何らの歴史的根拠にも立脚しないばかりか、倭寇対策で苦心惨憺し、沿海防衛の再建に心を砕いてきた当時の人々の事績をも冒瀆するものに他ならないのです。

参考文献

上田信『中国の歴史9 海と帝国』講談社、2005年。

山崎岳「巡撫朱紘の見た海---明代嘉靖年間の沿海衛所と「大倭寇」前夜の人々」『東洋史研究』第六十二巻第一号、東洋史研究会、2004年。

『中国軍民両用国家路網図集』星球地図出版社、2019年。



図12: 武備志・沿海山沙図を踏まえた中国東南沿海部地図・全レイヤー重ねバージョン